

# 小学校教材を用いた大学英語授業の実践と課題<sup>1</sup>

## The College English Classes Based on the Teaching Materials for Primary School

生田 和也  
Kazuya Ikuta

鹿児島女子短期大学

小学校教員免許取得希望者の英語に対する困難観や不安感の解消といった課題解決のため、本論では短期大学の児童教育学科の一般教養英語の授業において、小学校英語教材を活用した ESP 型の授業をデザインした。ESP 型英語授業の実践には一定の英語力が求められることが多く、既習内容の再教育と位置付けられるリメディアルとは共存しがたい。しかし本研究では、小学校教員免許取得希望者を受講者とする英語授業に小学校英語教材を用いることで、ESP とリメディアルが融合する学びの場を作ることを試みた。授業の実践からは、このような授業実践が受講者の英語 4 技能や英語コミュニケーションへの困難感・不安感を大幅に解消できる一方で、小学校教材をリメディアル教育に利用することは困難であることが判明した。

**Keywords** : Foreign language activities and education in primary school, English education in college, ESP

**キーワード** : 小学校外国語活動・教育, 大学英語授業, ESP

### 1. はじめに

日本国内の公立小学校では、3・4年生の外国語活動と5・6年生の外国語科目が2020年から正式に導入される。それに先立って2011年から小学校高学年には外国語活動が導入されており、また2017年から2019年は小学校で外国語教育が早期化・科目化するための移行期間と位置付けられている。現在では、大部分の小学校のさまざまな学年において、外国語すなわち英語の授業が取り入れられている。

小学校への外国語活動導入の当初から問題となってきたのが、教員側の英語教育への困難観であった(猪井 2009, ベネッセ 2010)。また近年では大学・短大等の教員養成校における小学校教員志望者についても同様に、英語教育への意識や困難感に関する調査が行われてきた(物井 2013, 福和・中津 2014, 中畑目 2014, 酒井・内野 2017, 田代・中尾 2018)。とりわけ酒井・内野(2017)の調査は小学校教員養成課程に課されるコアカリキュラムに基づいて教員志望者の英語教育への意識調査を行ったものであり、本論でもこの研究手法に負うところが非常に大きい。ただし本論では全15回の授業の前後で調査を行うことで、一時的な意識調査ではなく、受講生の英語能力や英語教育への意識の変容を測ることを目的としていることを断っておきたい。

小学校教員免許取得希望者の英語に対する困難観や不安感の解消といった課題解決のため、本論では短期大学の児童教育学科の一般教養英語の授業において、小学校英語教材を活用した ESP (English for Specific Purposes) 型の授業をデザインした。本授業で用いた教材である *Let's Try* は実際に小学校外国語の移行期間中に教育現場で広く利用されている英語教材であり、付随するメディア教材も含めて、小学校外国語教育という特定の目的のための英語を学ぶには最適の教材であると言えるだろう。

特定の目的のために用いられる英語という位置づけから、ESP 型英語授業の実践には一定の英語力が求められることが多い。一方で大学英語におけるリメディアル教育は、高等教育に必要な英語力が不足する学生への再教育と位置付けられる。よって従来、ESP とリメディアルは共存しがたい。しかし本研究では、小学校教員免許取得希望者を受講者とする一般教養の英語授業に小学校教材を用いることで、ESP とリメディアルが融合する学びの場を作ることを試みる。そしてこの学びの場を通して、受講者が小学校外国語への理解を深めると共に、英語への不安感・困難感を解消することを目標とする。

本研究では小学校外国語教材を用いて15回の英語授業を実際に行い、その前後で文部科学省が2018年に提示した小学校教員養成課程の外国語コアカリキュラムに基づいた自己評価アンケート調査を実施した。アンケートの設問は各項目に対する5段階評価と自由記述の設問で構成されており、本論ではこれらのデータを用いて本授業が受講者に与えた効果を量

的かつ質的に考察する。

## 2. 小学校教員免許取得希望者の英語への不安感

以下は2018年と2019年に、短期大学の2年次に配置された小学校外国語指導法の受講生を対象に行った、外国語コアカリキュラムに基づく自己評価アンケートの結果である。調査のうち今回は特に英語技能に関する部分を抜粋してある。

表1. 外国語コアカリキュラムに基づく自己評価アンケート（2年生4月）

アンケート内容	2018年 4月	2019年 4月
授業実践に必要な聞く力を身に付けている。	2.6	2.7
授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）を身に付けている。	2.4	2.3
授業実践に必要な読む力を身に付けている。	2.8	2.9
授業実践に必要な書く力を身に付けている。	2.7	2.7

アンケートはそれぞれの項目を5段階で自己評価するものであり、数字が大きいくほど自己評価の値が高いと見なされる。表1には全回答者の平均値を記載したが、上記の数値はすべて中間値の3を下回っている。この結果は、本調査の対象者である小学校教員免許取得希望者たちが、小学校教員としての自身の英語技能に関して大きな不安を抱えていることを示している。また特に「授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）」について、学生たちの苦手意識が強いこともわかる。

上記アンケートからは短期大学2年生4月時点の受講生たちが英語技能に対して抱く不安が明らかに読み取れるが、小学校での英語教育の早期化や科目化に伴って、教員養成校の外国語指導法の授業に求められる内容も過密化しており、これらの学生向けに、短期大学の2年次に設置されている外国語指導法の授業のみで英語能力の養成をすることは実際には難しい。そもそも小学校教員免許取得を望む受講者たちにとって、英語や英語教育を学ぶための大きな障壁のひとつが授業時間数の不足である。教職課程の再課程認定においては、外国語の指導法のみならず、外国語に関する専門的事項を学ぶ科目の新設も推奨されてはいるが、筆者は両者を足した30回の授業でも授業時間は不足していると考えている（生田32）。このような状況下において、1年次の一般教養の英語科目に小学校の英語教材を用いてESP型の授業を実践することには、小学校外国語に関する学習時間の確保や英語4技能の向上のみならず、外国語指導法への円滑な学習の接続にも効果が期待される。

本調査の調査対象としたのは、2019年に1年次の一般教養の語学科目において英語を選択した児童教育学科の学生のうち、特に小学校教員免許の取得を目指す42名の受講生である。これらの受講生に対して、1年次4月の段階で先述の表1と同様の調査を実施し、その平均値を表2にまとめている。アンケート内容は同一であるが、表1と表2では調査対象者や学年が異なることに留意したい。

表2. 外国語コアカリキュラムに基づく自己評価アンケート（1年生4月）

アンケート内容	2019年 4月
授業実践に必要な聞く力を身に付けている。	2.9
授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）を身に付けている。	2.5
授業実践に必要な読む力を身に付けている。	2.9
授業実践に必要な書く力を身に付けている。	2.8

表1と表2は調査対象者が異なるため、2つの調査結果を単純に結び付けて論じることはできないが、英語4技能のいずれの数値も中間値を下回ることで、また特に「話す力」に関する不安が強いことなど、ここからは表1とほぼ同等の結果が読み取れる。以下の図1は、上記の表2の結果をさらに細分化して示したものである。

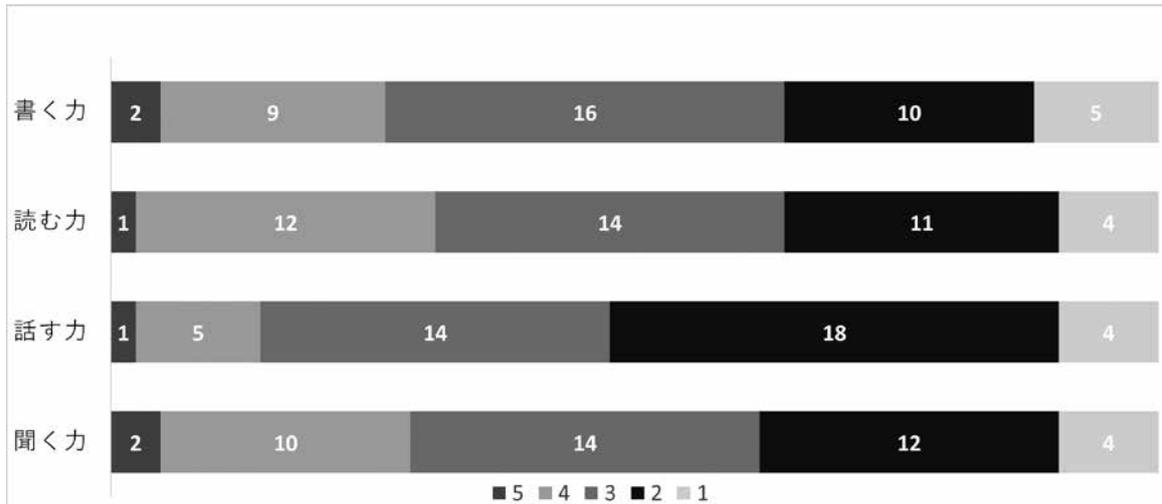


図1. 外国語コアカリキュラムに基づく自己評価アンケート（1年生4月）4技能別

4技能のいずれにおいても過半数の受講生は自己評価として中間値以下を選択しており、その傾向は特に「話す力」について顕著に読み取れる。上記4技能はいずれも小学校の外国語を教えるために必要な能力であるが、とりわけ「聞く力」と「話す力」は小学校中学年の外国語活動から求められる基礎的な英語能力であり、本授業でも英語による活動を多く取り入れることで受講生のヒアリングやスピーキング能力を高めていく必要があることが判明した。

また本調査では、合わせて英語コミュニケーションや英語学習に関する基礎的な意識調査も実施した。その内容を表3ならびに図2に示す。

表3. 英語への意識調査の平均値（1年生4月）

アンケート内容	2019年 4月
英語の学習は好きか。	3.1
英語を使って他者とコミュニケーションを取るのは好きか。	3.0



図2. 英語への意識調査の詳細（1年生4月）

先述の自己評価アンケートのように英語4技能について尋ねるのではなく、単純に「～が好きか」という形の意識調査であったこともあり、受講生の平均は中間値以上となっている。ただし図2では、実際には受講生の約30%が「英語を使って他者とコミュニケーションを取るのは好きか」という問いに対して1や2の低評価をつけている。そもそも外国語の早期化や科目化の根幹には、英語コミュニケーション能力の向上の必要性があり、外国語の学習指導要領でも英語授業におけるコミュニケーションの重要性が強調されていることは言うまでもない。小学校教員が外国語を児童に効果的に教えるには、まずは初歩的な段階として、教員自身が外国語や外国語によるコミュニケーションを教えることを好きになり、楽しむ必要があるだろう。この調査からは、本授業においても英語学習や英語コミュニケーションの楽しさを受講生に感じさせるための工夫が必要とされることが、新たに明らかになった。

### 3. 小学校教材の活用実践

今回の調査で用いた教材は、小学校外国語活動の教材として作成された *Let's Try 1* と *Let's Try 2* である。本調査は短期大学1年生の前期の英語授業で実施したものであり、後期授業では高学年向けの *We Can 1* と *We Can 2* を教材としたが、後者の授業についてはまた別の機会に詳しく取り上げたい。

本研究では小学校外国語で求められる英語表現の習得や英語の既習内容の復習を当初の目的としていたが、前節で紹介した4月の自己評価アンケートをもとに、英語4技能のうち特に聞く・話す力の養成や、英語学習や英語コミュニケーションの楽しさを知るといった内容も新たに授業目標として取り入れた。小学校中学年の外国語活動を対象として作成された *Let's Try* は聞く・話すという活動を主体として初歩的な英語コミュニケーションを学ぶ教材であり、本授業に最適な教材と言えるだろう。

授業は主に、クイズ、小学校外国語教材による学習、授業目標となるアクティビティ、コメントシートの記入という4つのプロセスで構成した。クイズは概ね隔週で実施するものであり、前々回・前回の授業内容から単語の意味、適語選択、適語記入などの設問を出し、その結果を成績に含めることで、受講生たちに英語の知識面での授業外学習を促した。

小学校外国語教材による学習では、*Let's Try* に準拠したメディア教材を多用した。*Let's Try* 自体が英語コミュニケーションの入門編として、初歩的な英語を聞く活動から話す活動へと段階的に学べる設計になっており、授業でもその形式を踏襲した。ただし、利用する英単語を教科書に限定しない、教科書では手書きのイラストを用いる部分をスマートフォン等で撮影した写真で代替するなど、適時受講生である短大生の英語技能や授業環境に沿った内容になるように配慮した。

また単なる音声のリスニングだけでなく、メディア教材の英会話の動画を模倣したスピーキング活動も積極的に行った。特に毎回の授業では、「初対面のあいさつをする」、「自己紹介をする」、「友人と好きなものを伝え合う」など、リスニングとスピーキングを中心としたコミュニケーションの実践を目標として設定した。図3には学生が実際に英語でコミュニケーションを行う様子を例示してある。



図3. コミュニケーション活動の様子

授業最後に記入するコメントシートには、学習内容のまとめ、授業へのコメントだけでなく、授業で達成できたこと、という項目を設けることで、その日の授業のふりかえりを can do 方式で行えるようにした。また小学校外国語の教材は本来ならば各ユニットを複数の時間に分割して授業計画を作成するものであるが、本授業では時間の都合上や受講生の英語習得度を踏まえて、ひとつの授業でひとつのユニットを、時に内容を割愛しながら扱ったことを断っておきたい。

ESP 型授業の一環として、小学校教員免許取得希望者向けの英語授業に小学校外国語の教材を用いたことで、多くの受講生たちは高い学習意欲のもと、各活動に積極的に取り組んでいた。また今回の受講生が小学校教員免許だけではなく、幼稚園教諭免許や保育士資格など幼児教育に関する複数の免許・資格を目指す学生たちであり、普段から短大授業で歌や踊りなどの表現活動に親しんでいることもあり、チャンツや歌といった活動にも積極的に参加する姿が見受けられた。

また同様の積極性については、毎回の授業の目標として設定した中心となる活動の際にも見受けられ、受講生たちはそれぞれの場面に応じて自由に教室内を歩き回り、英語によるコミュニケーション活動に活発に取り組んでいた。このような受講生の積極性は、授業に ESP を取り入れた成果として捉えることができるだろう。

前節の「英語への意識調査」でも触れたが、本授業にはそもそも英語に対して苦手意識や不安感を持つ学生も一定数存在していた。ただし、学生たちの活動の様子や、毎回のコメントシートの記入内容からは、授業で扱った英語内容に関して否定的な印象は見受けられなかった。この点については、できるだけ平易な語彙や表現で短時間の英語コミュニケーションができるように設計されている小学校外国語教材が、特に英語を苦手とする受講者に対して果たした役割は非常に大きいと言えるだろう。

一方で、*Let's Try 1* と *Let's Try 2* はたしかに小学校の外国語教材ではあるが、これらの教材を既習内容の復習にあたるリメディアル学習に用いることは実際には困難であったことも付け加えておきたい。特に本授業の毎回のコメントシートには、新たな語彙や表現を学べたことへの肯定的なふり返りが多く見受けられ、受講生たちは復習ではなく英語の新たな学びの形として今回の教材を認識していることが読み取れた。

#### 4. 成果と課題

本論の1・2節で述べたように、本研究は一般教養の語学科目に小学校外国語教材を導入することで、小学校教員を目指しつつも英語への不安感や困難感を持つ短期大学1年生に対して、小学校外国語に関するESP学習や既習内容の復習にあたる英語のリメディアル学習を行うことを目的とした。また1年次4月の自己評価アンケートの結果を受け、英語学習や英語コミュニケーションの楽しさを受講者に実感させることも新たな目的として加えた。前節で紹介した内容で全15回の授業を実施した後に、本研究では受講生たちの変容を計測するため、1年次8月に自己評価アンケートを再度行った。

ここではまず、英語や英語コミュニケーションに関する意識調査の結果を確認したい。以下の表4と図4は、受講者の英語への意識の変容をまとめたものである。

表4. 英語への意識調査の平均値（1年生4月と8月）

アンケート内容	2019年 4月	2019年 8月
英語の学習は好きか.	3.1	3.9
英語を使って他者とコミュニケーションを取るの好きか.	3.0	4.0

「英語の学習は好きか」、「英語を使って他者とコミュニケーションを取るの好きか」といういずれの設問に対しても、15回の授業の前後で数値の大幅な上昇が見受けられる。特にここでは、数値の変化がより大きかった英語コミュニケーションに関する設問について、より細かく確認したい。

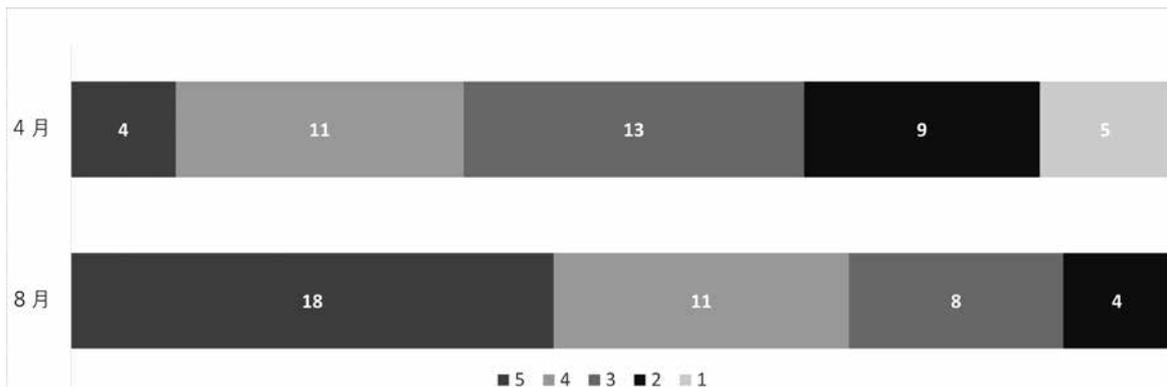


図4. 英語を使って他者とコミュニケーションを取るの好きか（1年生4月と8月）

図4からは、「英語を使って他者とコミュニケーションを取るの好きか」という設問に対し、8月の自己評価では5を選んだ受講生が大幅に増加し、一方で1や2といった低評価の数が減少していることがわかる。特に8月の調査では、3分の2以上の学生が4や5といった高い自己評価をしており、このことから本授業が、学生の英語コミュニケーションへの不安感を軽減したことが読み取れる。

また8月の調査では4月度の調査内容に加えて、「小学校の英語や子ども向けの英語について、どのようなことに気づきましたか」という自由記述の欄を設けた。有効回答者は42名中40名であり、これらの記述のなかで最も多く使われた語は「コミュニケーション/コミュニケーション能力」であり、その数は延べ40回に及んだ。また次点では「楽しむ/楽しませる/楽しく」といった語であり、使用された延べ回数は31回だった。これらの結果からも、本授業が英語や英語コミュニケーションの楽しさや重要性を受講者に伝えるという点においては大きく貢献できたと言えるだろう。

次に、受講生の4技能に関する自己評価の変容を確認しておきたい。表5は、第2節の表2と同一の調査を15回の授業終了後に再度実施し、その結果をまとめたものである。

表5. 外国語コアカリキュラムに基づく自己評価アンケート (1年生4月と8月)

アンケート内容	2019年 4月	2019年 8月
授業実践に必要な聞く力を身に付けている.	2.9	3.8
授業実践に必要な話す力(やり取り・発表)を身に付けている.	2.5	3.7
授業実践に必要な読む力を身に付けている.	2.9	3.9
授業実践に必要な書く力を身に付けている.	2.8	3.9

表5からは、本授業の受講生たちが小学校外国語教材を用いた英語授業を受講することで、小学校の英語教育で求められる、聞く、話す、読む、書くといった英語4技能について自信を大きく高めたことが読み取れる。また4月度の調査で特に学生の自己評価の低かった「話す力」に関する調査結果の詳細を、以下の図5に示す。

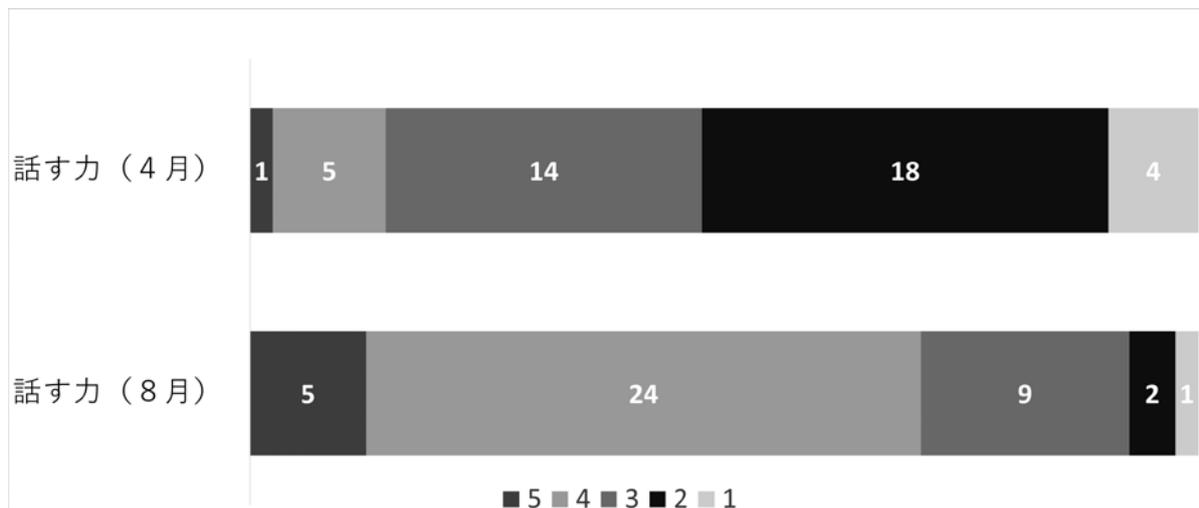


図5. 授業実践に必要な話す力を身に付けている (1年生4月と8月)

図5からは、本授業が受講者たちの英語を「話す力」への自己評価に大きな影響を与えたことが見て取れる。特に8月の調査では高評価をつけた受講生が急増しており、8月調査対象者の70%以上が、「授業実践に必要な話す力(やり取り・発表)を身に付けている」の項目に4か5の高評価を選択している。前節で紹介したように本研究では小学校外国語教材を用いて、授業内で受講生たちがリスニングやスピーキングなどのコミュニケーション活動に積極的に取り組めるよう心がけており、その結果受講生たちの英語を話すことへの不安感・困難感を大幅に軽減することができたことがわかる。

一方で8月の調査からは、小学校外国語教材を大学英語授業に導入する際の今後の課題も明らかになった。例えば8月期の調査には「英語指導に関する不安な点」をいう自由記述欄を設けたが、そこには英語の発音やALTとの会話といった内容が多く記されていた。本研究では小学校外国語教材を用いることで、小学校教員志望者の英語技能や英語コミュニケーションへの不安感や困難感が軽減されることが明らかになる一方で、実際には未だ多くの受講生が、英語指導の不安な点として発音やコミュニケーションを挙げている。この矛盾については今後さらに検討が必要ではあるが、その糸口は図6に挙げたある受講生のアンケートの記入例に見出される。

図6は先述の「英語指導に関する不安な点」という8月度の自由記述アンケートへの回答のひとつであり、ここでは他の受講生と同様にコミュニケーションや発音への不安が書かれている。ただしここで注目したいのは、この受講生の記述が「ALTの先生がこられた時にコミュニケーションがとれるか」、「子ども達(原文ママ)に聞きとりやすいきれいな発音」など、実際の学校現場で英語を用いる相手や場面に基づいて、自身の英語技能の現状への不安を述べていることだ。これは、小学校外国語教材を用いた授業を通して、受講生が小学校英語への理解を深め、自身の英

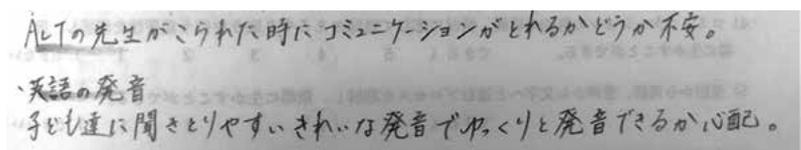


図6. 英語指導に関する不安な点 記入例

は、この受講生の記述が「ALTの先生がこられた時にコミュニケーションがとれるか」、「子ども達(原文ママ)に聞きとりやすいきれいな発音」など、実際の学校現場で英語を用いる相手や場面に基づいて、自身の英語技能の現状への不安を述べていることだ。これは、小学校外国語教材を用いた授業を通して、受講生が小学校英語への理解を深め、自身の英

語技能を高めたことで、小学校外国語教育に対してより具体化した自身の課題を見出すことができた証左と捉えることができるだろう。そしてこのように具体化された課題に対して、2年次の外国語指導法等の科目においては、英語教育の視点からさらなる学びを提供することが求められる。

## 5. おわりに

本研究では、小学校教員免許の取得希望者に対して小学校外国語教材を用いた大学英語授業を実施することで、受講生たちが英語技能や英語コミュニケーションへの不安感や困難感を緩和できることを明らかにした。またESPの一環として小学校外国語教材を用いたことで、受講生の高い学習意欲、積極的な授業参加、小学校外国語への自身の課題の具体化などの効果を確認した。一方で、小学校外国語教材は多くの受講生たちによって新たな英語の学びの形であり、今回の授業実践をリメディアル学習として位置付けることは困難であることも判明した。

小学校での外国語の早期化・科目化は2020年に本格的にスタートし、今後の発展のためには質の高い小学校教員の養成が大きな課題となることは間違いない。本研究は短期大学の1年次4月から8月の間の学生の変容を追ったものであり、今後も継続的に調査を実施することで学生の小学校外国語に関する意識の変容を追跡し、小学校教員養成課程における外国語教育の在り方を問い続けていく。

## 註

- 1 本論文は第21回映像メディア英語教育学会九州支部大会（於：福岡大学）における口頭発表「小学校外国語早期化に対応した授業デザインとメディア教材の活用：ESPとリメディアルを融合した授業作り」に加筆修正を施したものである。

## 引用文献

- 生田和也。「外国語の指導力に関する学びと変容：コアカリキュラム案を踏まえた授業デザインと自己評価分析」『鹿児島女子短期大学紀要』第54号。pp.21～36. 2018.
- 猪井新一。「英語活動に関する小学校教員の意識調査」『茨城大学教育実践研究』第28号。pp.49-63. 2009.
- 酒井英樹・内野駿介。「小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評価：小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から」JES Journal. pp.00-115. 2017.
- 田代裕一・中尾かおり。「教育課程改革に関する意識調査：小学校における教科「外国語」をめぐって」『西南学院大学教職論集』第1巻。pp.79-90. 2018.
- 名畑目真吾。「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」『小学校英語教育学会誌』pp.131-146. 2014.
- 福和寛晴・中津樞男。「小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』第63号。pp.203-210. 2014.
- ベネッセ。「第2回 小学校英語に関する基本調査（教員調査）」2010。 <https://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=3179>.
- 物井尚子。「小学校外国語活動に対する英語科学生の意識調査」『千葉大学教育学部研究紀要』第61。pp.9-14. 2013.

(2019年11月26日 受理)